

増訂大日本地震史料を読む

首藤 伸夫*

1. 初めに

文部省震災豫防評議会著作兼発行による増訂大日本地震史料は、第一部が昭和十六年、第二部が昭和十八年七月、第三部も昭和十八年七月の発行である。いずれも謄写版印刷となっており、WORD への変換は極めて難しい。その代わり、引用されている書名を地震史料集テキストデータベースで検索すれば、WORD に変換された文章として見ることが出来る。ただし、機械的に変換しただけで文意を検討していないから、注意が必要である。

第一部は、懿徳天皇の御宇（西暦前 520-477）から慶長十八年九月二十日（西暦 1613.11.2）を扱っているが、「地震があった」などの記録であって、それには住民がどう反応したかの記述は殆んどない。そのため、ここでは第二部、第三部のみを取り上げる。

2. 老人、浅間山の噴火を予知

「〔後見草附録〕志賀紀豊書置
浅間山自焼老人先見の事

上野國碓氷郡姥島村といふところ有、此村に一人の老翁あり、天明二年寅歳の事なりしに、浅間山の麓より硫黄おびたゞしく出ると云ひければ、彼翁近隣の者兩三輩伴ひて役所に至り見れば、小き山に半分は残らず硫黄にして草木枯倒れたりし有さま常に變りて見えければ、翁是を見て云けるは、吾つら々々思ひ見るに、浅間の烟りは常よりおびたゞしく、此枝山も残らず硫黄と變じ、草木枯槁せしは是唯事にあらず、此地にあらたに火氣あつまりしと見えたり、満山の火氣強く常よりも百倍せる様子也、寶永年中吾幼若の頃なりしが、

父なる者の云へるは、何れ山近く住居なさば心得なくんばあるべからず、其土地變ずる時は大地ゆるぎ、満山の草木枯れ雷鳴するは、是其先證也、富士山の焼けし時も斯の如く鳴しと云へり、當山の木大小となく此時にして枯るは子細なくて叶はず、いか様一二年の内に變こそあらんと物語して、彼翁は他國へ居をうつし、親しき者にも此事を云傳へけれども、土民多く疑ひ信ぜずして是用ひず、後におもひあたりしとかや」（増訂 2, p.727）

天明二年は西暦 1781 年である。74 年前宝永 4 年（西暦 1707 年）の富士山噴火を経験した父親の伝えた変化が浅間山でも発生したので、危険と判断した老人は居を変え、その言を信じなかった村人は被災したのである。村人は、「古い話」で、「違う山」の事でしかないと思ったのであろう。

3. 地震の前触れ

地震の前兆と思われる現象についての記録もある。其中で目立つのは、それを信じて助かったという、石見銀山での例である。

「其後同国金山にいたりし時、去る地震には定て穴も潰れ、人も損ぜしにやと問しに、さわなく、皆云、此地むかし地震は以前にしりぬ、去る地震も三日以前に其徴を知りて、皆穴に不入用意せし故、一人も怪我なしと也、其徴はいかにして知る哉と問しに、地震せんとする前は、穴の中地氣上升して、傍なる人もたがひに腰より上は唯濛々として不見、是を地震の徴とすと云り、按に常に地中に入る者は、地氣を能知る、鳥は空中にありて能上升の氣を知る、今度地震せんとする時、数千の鷲、一度に飛を見る、又或人云、六月廿七日の朝、末日も出ぬ先に、虹丑寅の間(に脱力)立を見る、虹は日に向ひて立は常也、いづれ

*東北大学名誉教授

も常にあらざるは徴とやいはん、」(地震考)

(増訂 3, p.337) 天保元年(文政 13 年)七月二日(西暦 1830.8.19)

その他、地震の前触れとして下記のような記録が見られた。

① 享和二年十一月十五日(西暦 1802.12.9)

「[地球之圖] 地震考附載

又地震に徴ある事、現在見し所……廣島氏日譚に、享和三(ニカ)年十一月、諸用有て、佐渡の國小木と云湊に滞留せしは、同十五日の朝なりしが、同宿の船がゝりせし船頭と共に、日和を見んとて、近邊なるべし、丘へ出しに、船頭の曰く、今日の天気は誠に怪しげ也、四方朦々として雲、山の腰にたれ、山半腹より上は峰あらはれたり、雨とも見えず、風になるとも覺えず、我れ年來の如此天気を見ずとに大にあやしむ、此時、廣島氏曰、是は雲のたるゝにあらず、地震の上升(昇)するならむ、予幼年の時父に聞る事有、如此は地震の徴也と、片時も猶豫有べからずと、急ぎ旅宿の(にカ)歸り、主に其由を告、此地後は山、前は海にして甚危し、又來るとも、暫時外にのがれんと、人をして荷物など先へ送らせ、そこ々に支度して立出ぬ、道の程四里許も來らんとおもひしが、山中にて果たして大地震せり、地は浪のうつごとく揺て、大木など枝みな地に折ふしまろび、漸にのがれて去りぬ、この時小木の湊は山崩、堂塔は倒れ、潮漲て舍屋皆海に入、大なる巖満ち涌出したり、夫より毎日小動して、翌年六月に漸々止りたりとなん其後同國金山にいたりしとき、去る地震には、定て穴も潰れ、人も損ぜしにやと問しに、さわなく、皆云、此地むかし方地震は以前にしりぬ、去る地震も三日以前に其徴を知りて皆穴に不入用意せし故、一人も怪我なしと也、其徴はいかにして知る哉と問しに、地震せんとする前は、穴の中地氣上升して、傍なる人もたがひに腰より上は唯朦々として不見、是を地震の徴とすと云へり○下略」(増訂 3, p.148)

② 文政 11 年 11 月

〔小泉文庫所藏記録〕○越後小泉其明著

「山水の轉變 文政十一年霜月十二日辰刻より越国いたく地震ひり、山嶽の脱出せしもの長岡領にては六百六十餘ヶ所、又大面町の上下村松領域にて大いに脱出せるもの十ヶ所、皆田畠をくつがへせり、(増訂 3, p.266) ……………

かゝる大変なりしかば彌彦山一丈ばかりもゆりあがれりと云ふもあり、又は三里ほど海中へ突出せるほど妄説をいひはやせど、後に聞けば地震のをりは山いたく鳴りし事は正しく有りし事なり、江河の大小となく地震のときには水減じたりしこと所々の渡守らが現に見しところ、又上り下りの船子共は地震と心つかで水の逆立つを川くだといふ難ならんかと狼狽まはりしと云ふ、暫時のうちなれば舟のそこなふほどの事はなかりとなん、今井新田の獵夫徳松は此時鐵砲提げて川島に出でありしに、川中所々波立ちのぼること或は五六尺又一丈ばかり、岸辺はひきしほの如く數町陸となれるを見しといへり、凡て江河の堤缺下り、ゆり窪めて川床高ふ押出し、又池沼の類ひも岸をくぼめ水中へ砂を震出し、平地より高くなれる所もあり、山地の井筋は凡て山崩れて所々ふさがり、平地のは大かた水をゆりあげ雑喉蛙など常にさまよへり、」(増訂 3, p.266)

「上保内村長泉寺の井水は清らかにして味美なりと世人は云へると、水濁れば必ず變ありと古人傳へ來りしが、此年六月頃濁り、又十月の末濁あるを里人心おちつかぬに、果して大震にあひ、かの寺は本堂、太子堂など破壊し、庫裡は倒れ里の家は同じ様になり、死に失へる人さへありといへり、」(増訂 3, pp.267-268)

③ 天保元年(文政 13 年)七月二日(西暦 1830.8.19)

〔京都地震見聞記〕

「○頃口辛卯ノ冬永井飛州ヲ訪テ談話ノ中、去年ノ京震高槻ハ何ニヤト問ヘバ、帰国ノ途中ハ何モ無リシガ、帰城セシ翌日ニ地震ス、其サマハ尋常ノ地震トハ違ヘリ、マヅユラントスル前ニ、東北ノ方ヨリ鳴動ス、其音ハ何

カ物ニ触ル、如キ響キナリシガ、ヤガテ地震、其ユリヤウ常ノ如ク横へハユラズ、何カ環如クニ震ヘリ、強キトキハ立ツコト成ラズ、手ヲツキテキル體ナリシトゾ、

又京ノ人ノ言ヲ聞クニ、大震ノ前夜ニハ、空一面ニ光リ物アリテ、地面ヨリモ光リ物出現シ、大体晝ノ如クナリシユエ、人人訝リテ何ナルコトヤト云合ヒシガ、果シテ翌日ニカノ大震ナリシト、是モ飛ノ話、」(増訂 3, p.327)

(注：頁數に p.332 から p.323 に繋がるという誤りあり。この p.327 は 2 度目の p.327 である)

4. 神馬、川を上る津波を留める

寛政四年七月十二日(西暦 1792.8.29)

伊勢國二見ノ浦津浪ノ襲フトナレリ

「○勢州二見の浦に山有、そのいただきに伊勢三郎物見の松といふ所あり、そのかたはらに鹽をやく所あり、是は大神宮の御にへにそなふる所なれば、この山をみしほ殿といへり、寛政四年七月十二日晝、このみしほ殿の山より、雲おびたゞしく立のぼるとみるほどに、沖の方より高なみきたる事五度計、津なみなるべしと浦人さわざあへるに、みしほ殿の山より神馬の如きものかけくだりて、往来甚いそがわしく、さながら海にのぞんで波をふせぐ體に見えたるにあはせて、やう々々何事なく波をさまりぬ、○下略」〔譚海〕○津村正恭著(増訂 3, p.104)

この松には、源義経の家臣・伊勢三郎義盛が敵の軍勢を松に登って見張ったという伝説がある。現在は五代目の松が植えられているとのこと。

三重の歴史文化散策のマップ https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/map/detail?b_id=454209 を参照して描いたのが図-1 である。

この松から櫛川に沿って海までは 15.6km ほどである。小高い丘が地震で壊れ、海へ向かう津波が発生し、海からの津浪を推しとめたのであろうか。さらに川が浅くなり、海からの津浪に影響したのであろうか。



図-1 伊勢三郎物見の松(上)(下)
共に Google Map より作成

5. 災害後の盗み

いつの世でも、地震後のどさくさ紛れの盗みは免れない。

① 宝永四年

「宝永四丁亥十月四日午下刻大地震……夜に入ぬれば盗共此騒を幸に家物を奪むと、種々の妖言を吐て、又大汐入來又は出火也と高声に呼廻り諸人を却して觸邊る故、奉行役人は町々を警め、」(宝永地震記)○土佐採取訪(増訂 2, p.132)

「数千軒の家屋財宝汐に順て寄木を幸に命を免れたる欲情無道之者共、長櫃壹ツを五人三人して拾上、錠を砕き或は石を取て蓋を破り、内なる金銀衣服を爭取る、金箱を拾得た

る輩ハ小判大銀をば算り分て配_レ取之_レ, 壹歩細銀をバ手を升にして計取り, 酒樽俵米を奪合事さながら如_レ乱, 貧福利那に轉變するを言語同断之事共なり,」(宝永地震記) ○
土佐土佐探取訪〔宝永四年, 安政元年震災記〕
 ○田辺町鈴木融氏所藏 (増訂 2, p.134)

「宝永四年
 覚

一今度地震高汐に付船荷物流れもの金銀板材木等其外何によらず拾ひ取候者有之は奉行所へ可断出候, 川内を徘徊いたし猥ニ橋板材木等に極印を打書付いたし, 又は拾ひ取候族有之よし相聞候, 隠置以來相知_レ候ニ於ては曲事可申付候」〔攝陽奇観〕○浜松歌国著 (増訂 2, p.200)

② 天保元年

「天保元年七月二日(西暦 1830.8.19)京都及ビ隣國地大ニ震フ, 御所モ破損アリ, 二條城大破し, 仁和寺・嵯峨大覺寺・聖護院モ破損多シ, 京中ノ死者二百八十人, 傷者千三百人ニ達セリ, 龜山ハ震害多ク, 潰家二十五戸, 死者四人アリ, 大津ニ於テモ潰家六尺アリ, 宇治川ノ堤防悉ク損而損ジタリ, 丹波・丹後・因幡・越中等ノ諸國ニテモ是ノ地震ヲ強ク感ジタリ, ……………

其外神社佛閣, 洛外圍土堀之分, 不殘打倒し, 洛中洛外土藏一ヶ所も無難之分は無之, 寺社之内には佛光寺門跡は丸々打倒し, 中々筆紙に難盡事に御座候, 洛中洛外上下男女とも, 夥敷怪我人即死人も有之, 翌三日ノ六日迄は上下居宅住居不相成, 不殘往來又は空地へ野宿致し, 三日之間は晝夜の差別なく, 泣悲其聲, 野山に響候次第, 扱又右之通に付, 井水不殘泥に相成, 川水も同様に, 残暑強折から, 呑水に差支, 上下共大難澁, 飯焚にも竈不殘内碎, 用立不申候, いづ方も土間を掘候て焚候次第御座候, 追々白米も盡, 町家などは玄米炊候て給續き申候, 右の虚に乗じ, 盜賊徘徊致し, 其上晝夜火の元相改候へ共, とかく出火時々出来致し, 中中寺社の破損, 其外巨細には書取がたく御座候,」〔健斎叢書〕 (増訂 3, p.294)

「三日の夕, 火柱落候旨ニ而, 京中大火と申觸し, 何れも火事装束致し, 出火を相待居, 扱又家内不残り殘外江出居候事故, 明き家同前, 夫故盜人屋根傳ひに徘徊致候と風聞, 因て盜賊用心, 火之用心に而, 大日迄, 都合五日之間は騒々敷, 難盡筆紙候」〔甲子夜話〕 (増訂 3, p.298)

6. 干潟の魚と次の押し波

① 正平十六年六月二十四日(西暦 1361.8.3)
 攝津, 大和, 紀伊, 阿波, 山城諸國, 地大ニ震ヒ, 攝津, 阿波ハ津浪ニ襲ハレタリ,
 〔参考太平記〕

正平十六年六月二十四日(西暦 1361.8.3)
 攝津, 大和, 紀伊, 阿波, 山城諸國, 地大ニ震ヒ, 攝津, 阿波ハ津浪ニ襲ハレタリ,
 「七月二十四日ニハ, 攝津國難波浦ノ澳數百町, 半時計乾アガリテ, 無量ノ魚ドモ沙ノ上ニ一息ツキケル程ニ傍ノ浦ノ海人共, 網ヲ巻釣ヲ捨テ, 我劣ジト拾ケル處ニ, 又俄ニ大山ノ如クナル潮満來テ, 漫々タル海ニ成ニケレバ, 數百人ノ海人共, 一人モ生テ歸ハ無リケリ, 又阿波鳴戸阿波, 毛利家, 金勝院, 西原院, 天正本, 作_レ周防_レ, 按阿波周防 共有_二鳴戸_一, 俄ニ潮去テ陸ト成ル, ○下略」(増訂 1, pp.329-330)

② 慶長九年十二月十六日(西暦 1605.1.31)
 東海・南海・西海ノ諸道地大ニ震ヒ, 大津浪ヲ伴ヒ, 土佐及ビ阿波宍喰ニテ溺死スルモノ夥シ, 房總半島ハ三十餘町干潟トナレリ
 〔當代記〕

「慶長九年十二月十六日(西暦 1605.1.31)戌刻, 丑刁ノ方ニ魂打三度, 同地震, 其夜自關東上者, 今之之東舞坂ニ宿, 右之魂打ト聞ヘケレバ, 俄ニ大波來テ, 橋本ニ家百間程有所ニハ八十間計潮引テ行, 纔ニ二十間計殘ケル, 人多死, 折節舟ニ乗合ケル者, 荷物ヲハハネ, 舟ハ山際ニ打上ゲル, 其時釣ニ出ケル舟廿艘計, 行末不知, 此時伊勢國浦々潮數町干タリケル事一時計也, 漁人モ魚鮑已下心ノ儘ニ取所ニ潮俄ニ來テ, 大石モ浦々へ打ち上ゲル間, 生テ

歸者ナシ、其内二年老ノ者ハ如何様不審ニ思、急デ陸へ上者ハ少々生テ歸モ有ケル、右之波ノ上ゲル石ニ、蛇已下或五十或七八十有ケル、島々□□人屋、又兵糧ノ藏以下船網、無残所潮ニ流テ、行末不知、關東モ此波同前云々、二百四十四年先、康安元年辛丑○正平十六年七月廿四日、攝州難波浦ニ如斯ノ儀有ケル由、太平記ニ在之、大波之比、伊勢山田岡本七百間餘焼失、馬多死、紀伊國四國西國何モ同前也、地震ハ所々ニヨリ有大小、關東モ同前、上総國小田喜領海邊取分大波來テ、人馬數百人死、中ニモ七村ハ跡ナシト云々、諸國內海ハ不苦、攝州兵庫之浦ハ一圓不苦、是ハ先年丙申○慶長元年ノ地震、他所ニ超過シケル故カト、所ノ者申候、」(増訂 1, pp.670-671)

〔東照宮實紀〕

慶長九年十二月十六日、今夜遠江國舞阪邊高波打あげ、橋本邊の民家八十ばかり、波と共に海に引入られ、人馬死傷少からず、釣船は廿艘ばかり踪述を失へり、その時伊勢の海濱は數町干潟となり、魚貝あまた其跡に残りしをみて、漁人等是をとらんと干潟にあつまりしに、又高波俄に打上て、漁人等皆浣没せり、伊豆の海邊、みなこの禍にかゝりし、中にも八大島にては、民家悉く海にしづみ、五十餘人溺死し、田圃過半は損亡し、上総國小田喜は、こと更濤聲つよく、人馬數百死亡し、七村みな流失す、更に攝津國兵庫邊は害なしとぞ、」(増訂 1, p.671)

③ 寛政四年四月廿四日(西暦 1792.6.13)

後志地震ヒ津浪アリ

〔北海道史〕

「寛政四年(1792年)五月二十四日申刻今の午後四時頃西蝦夷地、地震ありて海嘯を生じ、忍路に於ては港頭の岸壁法界、海岸に引揚げ置きたる夷船皆漂流し、出流中の蝦夷五名溺死せり、美國ビクニに於ても和人夷人の溺死者若干ありしといふ」

〔真澄遊覧記〕○菅江真澄著

「この頃鯉のあひきにわたりたる海士人ら、蝦夷のをる島より歸る舟人など語るを聞は、

四月廿四日西蝦夷のヲシヨロ、タカシマ、オカムキ、シャコタン、ビクニ、フルビラなどいへる處になへふりて、潮ひて、なたも磯のこづくに石あらはれ、歩わたりして、そひ、あぶらこ、なにくれの魚、又かひつ物は、しゆり、あはひ、のななどは、石砂のこづく、わらしまで拾ひをるに、時の間におほ汐起り高波みたひより来て、蝦夷、和人いくはくの人波におほれ、磯やかたは、みなひき波にとられて、からくして山にかけのほり、岨にたつ木の枝をたつきにたくり寄せてをり、高き巖の末には、したゝみのこづくすかりて命いたるものもありき、吾等かしこくもむかし五十二年前たるつなみ○寛保元年七月十九日ノ津浪に、澳なるふねはことなかりしかと、ふるき翁のつねにをしへたるをまもりて、こたひ、なへし、磯の干たるを見て、こは津浪のより來ならん、いで眞沖にこき出よ、たれもたれもといへと耳にも聞入さるものは、みなこの磯にふねよせてしつみたり、わかふねは、あせと汐とにぬれて遠おきにいかりかけて、此わさはひをのかりぬるは、あめのたすけにや、又あかおやのをしへを、そむかさりけるにてそあなれといきもつきあへず、なか々々とかくいひて去ぬ、」

(武者註) 右の記事は寛政四年福山ニテ認メラレタルモノナリ、津波ノ日四月カ五月カ現在ノトコロ決定シ難シ、今假ニ真澄ニ從ヒ四月廿四日(増訂 3, p.104)

7. 村民争喰の事

爰に上州吾妻郡碓氷郡群馬郡の村々ならん、人数三四十人或は七八十人万三百人斗の者共手負を肩にかけ手そ引合などして、安中板鼻根木井出高崎倉賀野辺の村々へ充滿して押來り、人家へ押入り食を乞たり、されど此辺とてもいかゞならんも知ざれば、ニ々敷のみにて上を下へとかへし、聲々に罵りうか／＼として砂に埋られたは叶ふまじ、何れ立退んにはとさわぎ立たる中へ、彼ものども間屋本陣の大家を見かけて食物を乞けれども、右のさわぎの最中なれば中々耳にも聞入ず、却

て非人同前に呵り付たる所に、飢人等大にいきなり、今は是非なし食せざる事三四日に及ぶ、此所を一足も放れ行事ならず、餓死せんよりは此所にて食をからんにはと呼はりて富家へ乱入し、大音にいへるは、各かくの如く貯へある身の我々を見殺にし給ふは情なし、所詮食すばこゝにて死せん身なり、非道とばし思ひ給ふな、米穀のこらず借る所也、足手達者の人々は先の宿にて借給へと云捨てつゝ、理不盡に米大豆麥何に依らず残りなく持出、大釜をさがし出し田の中に据え飯を焚ぎ、集り者食せひかば、次第／＼に人数まし、後には跡より来りし者も是を學び、大小の家々に乱へし奪ひ取事なれば、男女の泣聲は天地にひびき、所の若者共は手に手に棒乳切木を持、白晝に盗取こそ狼藉なれ、悪き奴の振舞哉と数百人田の中に食せし最中追取かこんで打てかゝる、飢人を見えるよりもあら仰山なる人々かな、とても死ぬべき命ならばと一ト足より来れる飢人どもも是もおなじく力をそへ、所の者を真中に打かこんでさんざんにたたき合へば、田の中畑の中一面人となり、何千萬といふ数をしらず、同志打するも多く宿中の人々数多く打殺され、其外半死半生にて逃ちり、漸く日暮に騒動しづまりける故に、みな／＼明家／＼へ押入り、食物をたづね小家をこわしかゞりを焚て、二三日ぶりにて心よく伏たり、宿の者ども彼震動はさのみの事ならず、此騒ぎには家々安居しがたく、金銀持たるは江戸へ逃出、其外は不殘吾家吾家を捨て宿なしとなり、ともに食を乞ふ身の上となりたるぞおかしき、扨も此騒ぎ無程静りたる頃、生のびたる民どもには其程夫々に上より御救下し置ければ、魚の再び水辺にかへる心地して怡びあへり、かくの如く國恩誠に天地にひとしくありがたかりし事どもなり、(増訂 2, pp.729-730)

8. 大法事中の大地震、金廻(かなまわり)村の悲劇

金廻村(かなまわりむら)は、かつて岐阜県海津郡に存在した村である。町村合併によ

り廃止され、現在の海津市海津町金廻となった。その場所は、図-2に示す通り、木曾川のほとりにある。ここで文政二年大惨事が発生した。

御寺の法事に大勢が集まっていたところ、地震が襲った。

それを伝えるのが〔文化秘筆〕である。これは文化秘筆としてネット検索で入手できる。

「一六月十二日未刻通、勢州大地震有之、四日市白子神邊津並在々所々、桑名之在香取村ト申候所四拾軒程家建、悉ク微塵ニ相崩、猶又笠松ノ御領今(金ノ誤)廻り村海壽寺ト申寺院、其折節法談御坐候テ、近村ヨリ聴聞ニ相集り候老若男女數万ノ参詣人御座候處、其寺院微塵ニ相崩、怪我人數不レ知、即死七十五人、誠ニ大變ノ事言語筆紙ニ難レ盡、」(増訂 3, p.216)

海壽寺と云う寺は現存しない。金廻にあるのは皆受寺である。

また「一濃州金廻村浄土宗響受寺ト申寺法談有レ之夥敷参詣ニテ凡五百人程参り御座候處、右法談中地震ニテ余程大寺、いまだ新敷寺ノ由ニ候ヘドモ崩れ、天井鳴居梁等落、参詣ノ人三十人余り即死、其外手ヲ折、足をねぢ、脊中ヲウタレ、頭ヲ打、半死半生ノ輩數不レ知、直戸板ニノセ行候者夥敷候由、坊主八人ノ内、壹人ハ客僧ノ由、是者即死、亦少シスギテ死



図-2 皆受寺の位置 (Google Map より作成)

ストモイフ、跡七人ハ裏手ニ走り出候故、追々
承り申候ヘバ障ナキヨシ」(増訂 3, p.218)

9. 神託・流言

〔宝永四年、安政元年震災記〕○田辺町鈴木融氏所藏

「然るに彼賣僧山臥之類時口得て種々の浮言を傳へ、來何月日力は大潮、來月何の日ハ大地震出火也と妖言を作て人を惑しぬれば、府内之御役所より弼内に觸を遶らし、雜説浮言を傳る輩有らば急度召捕会所へ可引來と、下郡之役人國中へ雖示之不穩、就中同月廿二日三日府中之商人騒動すること如亂、其故ハ去頃國內之百姓郡縣村里之神宮毎に集会して、其所々之神徒(イチ)婦を神前に令舞、靈神之命を聞こると神託を取々と沙汰し、其中に何の神徒婦か云出けむ、當月廿二日三日去四日之地震ハ尚太き國難出來、府中之諸家悉く可及之、廢亡と見通す如く言罵ぬれば物も不辨愚昧痴鈍之輩次第に流言して、數百軒之町人此程從山林歸家せし輩も亦近辺之山岡へ取上らんと、資財用具を荷擔し周章すること夥し斯る忿劇之内にも難に不逢遊民共、落書之歌を詠み種々禁忌を言散す(諱ところ有て此に寫さず)雜言流説追日言募りぬれば、御奉行所より其神託之実否を可被問と沙汰有りければ、彼神徒婦令逐電と云へり、府中さへ如此、其外邦内之濱浦津浪渦卷入て海辺之民屋數々亡所と成る

當國九十有余の浦、大形は震潮に損傷して、汐の不_レ入所も震難に逢て大に傷み潰れぬ

其禍に逢たる輩の物語に曰、四日之晝大地震や否や海底の鳴事太鼓を打が如く、其響と等しく海上如黒烟なる氣覆ひ、暫有て彼黒氣晴ると否逆浪如_レ山に入來る、古今海の鳴ことハ大浪の前表なれば、浦人共其心得ハ乍有急波に驚き周章て、親族隣家に急を告て山岳陵坂に北げ上らんと、金銀家宝を袋にして吾先にと遁走る、兎角する中に汐漲り來り、漁人商工百姓之茅屋、寺院神宮浜令之役所、瞬目之間に漂流し潮に被_レ曳て流れ往

く有様、秋後之落葉之湖上に浮ぶ如し、北げ後れたる輩は不_レ殘浪に被_レ卷_キ入_レ溺死する者不_レ可_二勝計_一、父母妻子姉妹兄弟を失、主人家僕殘殺して泣哭する声蚊の鳴よりも尚囂すし、山陵に近き湊之家財を捨て北さるは大形命を助り、山遠く或は金銀衣服を荷擔し嗜欲なる輩は都て流死す

半途まで波に被_レ迫術計に盡たる旅客童女ハ路辺之大木に攀上て命を助る者多し」

(増訂 2, p.133)

10. 増訂 2 記念碑のあり方 橘 南谿

「余熊野海辺の長島といふ所に遊びしに、佛光寺といふ禪宗の寺あり、其寺に石碑あり、碑面に津浪流死塔と題せり、裏に手跡も俗様にて、文も俗に聞えやすく、宝永四年丁亥年十月四日未刻大地震して、津浪よせ來り、長島の町家近在皆々潮溢れ、流死のものおびたし、以後大地震の時は、其心得して、山上へも逃登るべき様との文なり、いと実体にて、殊勝のものなり、誠に此碑の如きは、後世を救ふべき仁慈有益の碑といふべしとなり、漢文にては益少かりぬべし、諸国にて碑をも多くみつれども、長島の碑の如きはめづらしく、いと殊勝に覚えし、其津浪の事、其あたりにてたづねしに、あまりふるき事にてもなければ、語り傳へて今におそれあへり、それより段々浦々にて尋るに、浪よせたりし浦もあり、又さのみ高くのぼり來らざる湊もあり、同じ南面の熊野の浦にて、かく違あるはいかなるゆゑぞと其地理を考ふるに、幅廣く常々は船のかゝりあしく、しかと湊ともいひがたきほどの所は、其の時津浪高からず、人家流るゝほどの事はあらざりしとなり、されば海幅狭くふかく入こみて、つねに船がよりよく、風のおそれもなしといふべき湊は、別して大地震の時は用心すべき事にこそ、○中略すべて津浪は一旦沖のかたへ俄に潮引去りて後、其返カエシ大に登り來るものとぞ、宝永の津なみも、一たん海水ことの外に引去り、つねに見えざりつる海底の岩などまであらはれぬれば、海辺のもの皆々あな珍しと見物

に出たるに、しばらくの間に沖より大浪よせ来りて、逃べく間もなく流れうせぬもの多かりしといへり、」(増訂 2, pp.209)

橘 南谿が感銘した碑文は、今は判読不能のようだが、

「石碑・民泊の“津波の記憶を刻む文化遺産－寺社・石碑データベース－”平賀大蔵『三重県下の海の石碑・石塔(2)－津浪関係の

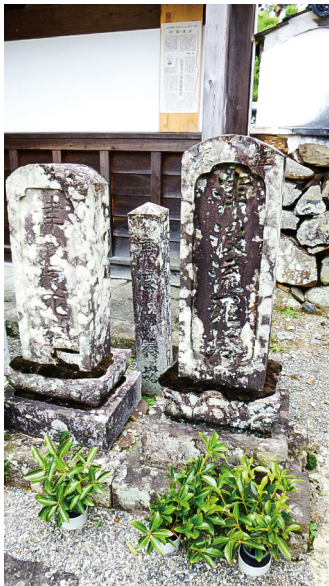


写真 -1 右が 1707 年宝永地震津波の供養碑、左側が 1854 年の安政東海地震津波の供養碑

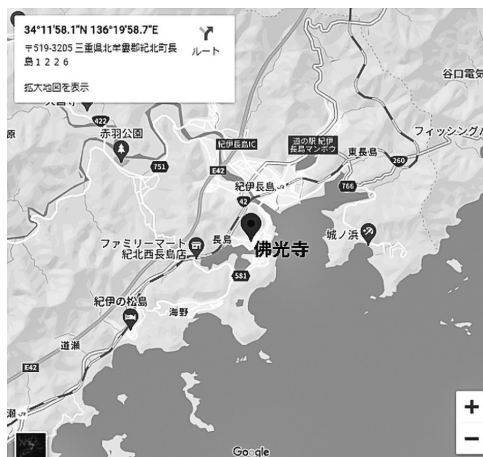


図 -3 仏光寺位置。GoogleMap より作成

碑・供養塔 -』『年報 海と人間』23:2-21.』
<http://sekihi.minpaku.ac.jp/spots/view/5300>, によると、

「碑文 inscription

津浪流死塔 (嘉永七年)

碑文縁起 (表) Inscribed history (front)

(正面) 径塚 津波流死塔

碑文縁起 (裏) Inscribed history (back)

(左側面) 〈風化はげしく判読難しい。中田先生の読まれたものを次に記す。〉

嘉永七甲寅年六月十四日丑の刻大地震 夫より十一月〔迄〕震動数度 同四日巳の刻大地震有津波 流家屋四百八十軒余 汐入三百十軒余 流死貳拾三人ニ及ぶ 則宝永度塚有之通自今己後大地震の時ハ可有覚悟事」となっているとの事。

11. 和歌・狂歌・詩

①宝永四年

奉納御宝前、宝永四年十月四日午の下刻ばかりに大なみして山もくづれ地もさけ家居なんどもたふるか人みな肝をけしあわてさわぎける、かゝる折柄、俄に大なる浪よせ来りて山内村の家居共ことごとく見るがうちにながれ失せにけり、老若男女此ありさまを見てあなおそろし海づらより高浪こそ立來たれ逃よ遁よと声々におめきさげびて手にとるものをだにとりあえへず山岡にはしりのぼりければ我も又人におくれじと財宝なんどもを打捨て井野山といふ所に分のぼり苔ふきの菴して苔の薙に草の枕三夜四夜ばかりのおきふしはいとあさましかりけりしかはあれど門よりこなたへは浪も來らず家居もあやまたず、をだやかなりしこそ有がたくおぼえ侍りけれ彼山にありつるほどに或人のかたりしは是より遙に海づらを見侍りしに鹿島の沖より彼山を五つ六つ重ねあげたらむほどの浪立來る中に白く圓にして妙なる光ありけるものゝ見えければあやしく目もはなはずと見かう見しばしがほど見けるに其の浪沖にして大と小と二つにわれ大なるは東のかたへ行小きは此浦へよせ來る彼圓に光りしもの大なる浪のうちに打かこ

みてつれゆきしが芳養の沖わたりとおぼしき
所より其浪をはなれ鹿島の御山へ飛降りてか
くれぬこはふしぎなりけれ、かゝりし事もあ
りけることにやといとまことしやかに語り侍
りし、是則鹿島の御神体にいさゝかうたがふ
ところなかるべし、さてこそ一邑のみにして
この里には浪も來らざりけれ、誠にかたじけ
なしといふもおろかなりける抑々鹿島の御神
体と申奉るは武甕槌の尊にてわたらせ給ふ

昔日芦原の中つ国を平げ邪なる神をしづめ
給ふとかや、常陸の國より三笠山にうつりお
はします春日四所の中には第一の御殿是なり、
又御本地を尋ぬれば格別体おはしますといへ
ども中にも地藏薩埵とげきやうしたまひすべ
て慈悲萬行大菩薩と仰奉る、或は又三千大世
界のあるじ輪奐大竜王の変化とかや、利正無
盡の方便れいげんあらたにめでたくまします
こと誰の人かこれを信じ奉らざらんや、かゝ
るふしぎをまのまへに拝み奉ること浦松の千
代をかけて尚此里のさかゆくすゑ頼もしくこ
そ覚え侍りけれ

沖つ浪われてしづけし鹿島なる
神の御地の深きめぐみに
幾ちとせ浪もあれじな此浦の
かしまの磯のつきぬかぎりは
浦の松栄えもしるき三銅や
鹿島の浪のそふるひゞきに

宝永五戊子六月吉日 山内重賢謹白（増訂 2,
pp.124-126）

②天明三年七月

天明三年七月八日（西暦 1783.8.5）浅間山大
噴火ヲナス

〔浅間焼見聞實記序〕いさこの降りける頃よ
める

明房

おちこちの草もいさこにむもれては
こゝも浅間の野らとなりける

重秀

浅間山あさましの世となりにける

まぢるともきも砂につかれす

去年の秋いたく砂のふりかゝりて、木々が

枝もかれ果ぬれば、花の春もなのみして、う
つ々々となかき日を送るに、かてさへすくな
ければ飢人こゝかしこに、たふれふし、いとど
世の中、しつかならざれば、

世のうさをおもひ忘れて見るべきに

花さへ咲ぬはるやいかなる

重秀（増訂 2, p.617）

〔浅間焼見聞實記〕（上ノ巻）

江戸へも灰砂少しふり又白き毛ふりしとや其
頃何人の狂歌にや

間山なせ其やうにやかしやんす

けはふ々々が峯にあまりて

（増訂 2, p.620）

……

又錢出し兼ける人は竹にて拵用ひける、夫に
ても、手鋏よりは埒明ける、其外砂入を籠に
て作り、車にのせて引もありまた竹へのせて
引ける人もあり、其外好々の手段ありて綾よ
し、暴よしといへど、龍相手にて、もつこへ
入れかつぎし方第一よかりし、又ひとりかつ
ぎもよし、車にて引けるも草臥少なくしてよ
ろし、砂を高く重ねける時あしかりし、とに
かく＝事＝しき＝へ＝は万事を専一とす、
＝在共に奇病身なるもの留守番して女わらべ
諸＝人迄開發に出ぬれば

しのぶれどたこに出＝＝＝＝＝＝

砂やにのふとひとのとふまで

（増訂 2, p.622）

〔浅間焼見聞實記〕（下ノ巻）

またがしはあらぬみやこの八重櫻

けふみてあすはかへし玉われ

信貞（増訂 2, p.634）

根岸丸部左衛門様御普請がかり惣御頭として
澁川に御旅宿あり、其頃何ものかよかける。

浅間山根岸の泥が押出して

川邊返りは丸部左衛門。

川原田村原田清右衛門様御＝り貳百八拾石の
村也、（増訂 2, p.644）

〔浅間記〕

孫ひこへかたみに書し老の筆

けんやく積んで飢人助けよ

種まけばついに一度はをいるもの

悪事じはすて、能種を蒔け

大正元年十二月群馬縣吾妻郡原町富澤久平氏
所藏原本より寫す (増訂 2, p.681)

〔砂降り以來三年日記〕 ○石井與右衛門著
(増訂 2, p.690)

信州浅間山大焼の次第
世間もゆるみ候三ヶ月の御姿直成を拝して。
月はすなを穀のたるみに世のゆるみ。
巳の冬句

老眼に筆の歩行も千鳥足

砂降りの年は時ならぬ八月に至り木々に
花さき桑のめもしやうじ蠶杯も出申候よく年
は木々に花實をしようぜず漸く己の年に至り
草木共に花實をしようじ萬物共にゆるかはし
く相成申候に付

午の年歳旦

三味線に歌乗り初や午の春

彌午の彌生の頃に相成候ハば草木にも花咲き
人の心もゆるかはしく相成り申候を詠め侍り
上巳句

人も木も三年こへて花の春

卯月八日句

民の氣も延行く藤や夏けしき。

大正元年十二月群馬縣碓氷郡東上秋間村石井
泰太郎所藏の原本より謄寫す。
此記の著者與左衛門氏は泰太郎五世の祖なり
と云ふ。 (増訂 2, p.697)

③寛政十一年五月二十六日(西暦 1799.6.29)

加賀國金澤大ニ震ヒ、金澤城下ノミニテ
モ、潰家二十六戸破損家四千六百六十九戸、
土藏ノ崩壊並ビニ破損九百九十棟、死者
十五人ニ生ゼリ

〔續漸得雜記〕

地震八景

春日野晴嵐

**地震よりさきにくづる、引山は袋の神のあ
らし吹くかも**

是は小立野末に袋村あり、其村に一字の宮あ
り、春日神主持分也、今年三十三年目に而開
帳とて、金澤中一統に色々拵、夥敷事なり、

神輿之御出之節引山いたし候處、小立野より
堂形前まで引來る處、彼所ニ而餘り群衆に而
逆も春迄は引がたしとて、其處にて止め申候、
其事を申由、此神如何成事にや、先年も開帳
之時不時に雪降申とかや、今度御出二・三日
立地震に而、中々宮参りする者もなし、其後
いつの間にか御歸輿也、誰知者なし

大橋夕照

**大變な事と口々々間暮入日も家もかたむき
にけり**

磯の落雁

**世なおしと妻や子供を引きつれて家居もと
もに落る雁金**

宮坂の秋月

**あきもせぬ此世をさりし神主の湖水に沈む
うんの月影**

是は神主其所八町四方計地行所之内に而、其
村方えおろし渡し高利を得る故、神主勝手宜
家作に取懸り、五月二十日日棟揚祝之由、神
行ひも子供に仕置由、其節人口區々に而沙汰
不宣也、

武士町暮雪

**白壁の土塀も崩れて道もなし時ならねども
雪かとぞみる**

明方歸帆

**津浪じやと舟拵へて沖の方しづか成のに碇
おろして**

長谷寺晚鐘

**一とうに家も土藏もそんじぬる跡は修覆に
入相の鐘**

愛宕下の夜雨

**ぬれ事を嫌はぬ身にもふる雨を嫌ふは山の
崩れとやせん**

(増訂 3, pp.130-131)

④文政二年六月十二日(西暦 1819.8.2)

伊勢、美濃、近江、地大ニ震ヒ伊勢湾、琵琶
湖ノ沿岸震害特ニ甚シク、倒壊家屋並ビニ死
傷者少ナカラズ、是日、京都・金澤・安藝・
信濃・飛騨モ亦震ヒ、金澤ニテハ潰家ヲ生ジ
タリ

〔世直双紙〕 ○猿猴菴著

今度地震に付ての狂詩に

地震

高塚已壊土藏危 如此地震未曾知

鯨公所業何騒動 我以瓢箪欲押之

作者不知

(増訂 3, p.210)

秋樂狂歌集に

寶永四_{丁亥}小春四日に大地震ゆり治りて高木氏より秋樂の主によみて遣す

神の旅道中づけの古あふき要やぬけてかく

はゆるらん

秋樂返事に

鈴鹿地のふり治りて神かぐら伊勢の尾張に

立浪もなし

この比の人の心は千早振ちはやふるふと神

祈るなり

かやうの狂歌どもに候まい心合にも一首

讀てと云こされければ

寝てしらぬ身にてやすけれ古のかのゆり若

の大ぢしんかも

(増訂 3, p.214)

或人此地震雷より思ひ寄ての狂歌に

よい歌を誰ぞ讀んだかあめつちの

しきりにうごく地震かみなり

(増訂 3, p.215)

⑤天保元年七月二日(西暦 1830.8.19)

京都及び隣國地大ニ震フ、御所モ破損アリ、二條城大破し、仁和寺・嵯峨大覺寺・聖護院モ破損多シ、京中ノ死者二百八十人、傷者千三百人ニ達セリ、龜山ハ震害多ク、潰家二十五戸、死者四人アリ、大津ニ於テモ潰家六尺アリ、宇治川ノ堤防悉ク損而損ジタリ、丹波・丹後・因幡・越中等ノ諸國ニテモ是ノ地震ヲ強ク感ジタリ、

〔地震奇談 平安萬歳樂〕

大地震祿上

周章騒ぐも道理こそ、二日夜は大道にて夜を守らんとするに、夜氣うけん事を思ひ、板もて屋根となし、又縄を引わたし、むしろを覆

ひて、洛中皆夜明し、町々には嚴重に高張を立て、家並にかけあんどを釣りて、身は陣笠をかぶり、胸あてりしく、馬提燈をともし、近き友親類へ見舞に廻る事お互ひにて、ころび寐の枕元へ、犬の這ひ來るもいとおかし、井の水は皆濁れり、少し氣のおさまれる方は、大道にて茶をわかし、飯をものし、酒をものし、酒をくみ、漸食物のんどを通るといへども、心はそぞろに、只ドロ／＼とゆりたへず町内にはかな棒、わり竹を引鳴し、火用心觸歩行こと嚴敷、何方よりか老人の來りてまじなひあたへるあり、其歌に、

ゆるぐとも、よもやぬけじの、要石、

鹿島の神の、あらん限りは、

と、皆書写し、戸口の柱、或は大極ばしらに張付、もつたいなくも天照皇太神宮の御祓ををかしらに戴き、髻にまじないの秘文を挟み、殊に老人病人子供を抱きしものは、其心配得もいへず、中に家におされ倒るゝあり、又物にはさまれ、塀に押れてなやみぬる聲かまびすしく、くすしの西東へ馳るを聞につけ見るに迷ひ、こと心づかひして、其夜も東しらみをまち、明る三日、日もかわりなばちとゆるがんことを祈り、人の顔色かわり、俗語に青い顔といふらせしもむべなる哉

(増訂 3, p.312)

.....

明け六ツ時や、曇りて、雨ばら／＼と降出しけるに、跡一天雲やけとなりて一めん黄色になり、誠におそろしきけしきなること、皆人の取々沙汰しける中にも、ドロドロと時をたがへずゆりたへず、又古家古土藏のたおれかゝるに、杖をつきつゝぱりしてとゝめたるは夥敷餘多あまた有、俄の家がへする人、あちこちにかしましくて、四日も難なく、夜はいかなる者も少し身の勞れ出て、たゞまどろむうち、五日となり、手の舞足の蹈どころもしらず、六日、七日、八日夜も、空は曇りて雨は少しも降らず、夜八ッ時、七ツ時に、大分つよくドロ／＼とゆり來り、皆大道へ又出で、取沙汰も是が七日七夜のはてなるかと言々呪居まちなかぬるに、九日になり、いまだドロ／＼と時々鳴り止まず、誠に前代末聞

の大變にて、只神を祈り佛を信じ、身を慎む
より他事なし、心得の歌に、

かみなりは(にカ)、あたま叩かれ、地震とて、

尻つめらるゝ天のおしかり、

其外洩たるは後編に出す、此草紙は、今度の
大變、他國へ文通にてしらせる人、此小冊に
而ことくわしく相分、且又後世までのこし置
なば其心得にもならんことを深く思ひて、こ
こにしるす、文政十三年寅七月洛住東鹿齋作

(増訂 3, p.313)

此時清水寺の廊下崩れ倒るゝよし、是等も前
代未聞の事どもにて、是が止となる歟と皆い
へり、そも日本は神國にて萬代不易の國なり、
雷地震は陰陽水火のたゝかひにて、國を動か
すにあらず、只土のうごき、亦土生金とてつ
れてかねもうごきめぐる、俗語に雨降て地か
たまると、地震も納り世なを(ほ)しとかや、
ます／＼五穀は豐作、下も萬民のうるお(ほ)
ひ、御代萬歳樂とうたひ、めで度／＼、

天が下、うごかぬ國と、おさまりて、

うるお(ほ)ひ廻る、あらがねの土、

(増訂 3, p.314)

天地震動無仕様、○一句缺ク、全詩前二出ヅ、
併セ書ルベシ、

加茂季鷹が書状の端に、

地震のうたと人の申候故、地歌よむは残念、
さて名歌詠候はば、まだ天地を動すべければ、
咏ぜずと答申候、夫に付、御慰に別紙入御覧候、

地震 鉢の木

いつの世にかは忘るべき、(原書、缺ケタリ、)

何とて以前には承候はぬぞ、 土御門、
嘸笑ふらん、 世直し、
飛で散亂す、 石燈籠、
寢られねば夢も見ず、 貳枚住居、
いたはしの有様や、 潰れし家々、
自然の時の爲にて候、 御礼、
夜寝の更るに付、次第に寒く成て候、
街道の夜明し、なん方無念の事候、

さんどゝの體に罷成て候 怪我人、
さんどゝの體に罷成て候 瀬戸物やと、
さんどゝの體に罷成て候 植木屋、

これ見給へや人々、 大佛の石垣、
おびだしく登る、さぞあるらん、

國々の見舞、
實に是も心得たり、 用心水、
よろこびの眉を開きつゝ、 大工、
心ばかりはいさめども、 左官、
かひゝ敷はなけれども、 素人の手傳、
いそげども々々 借家の普請、

~~~~~  
七月二日、震ふりて、人々都の大路に床作り、  
かり居に夜を明けるは、まことに泰平の折に  
あへるよろこびをかしこみて、

十陰

震ぞとて、外に臥すへの、涼しさは、  
戸ざ{=}ぬ御代の、しるしなるらん、

大江廣海

ぬばだまの、夜晝わかぬ、震ふりに、  
うごくは人の心なりけり、

狂歌

安亭

家藏も、もみくちやにする、大地震、  
人の心も、もめるかみがた、

(増訂 3, pp.321-322)

七月二日、震ふりて、人々都の大路に床作り、  
かり居に夜を明けるは、まことに泰平の折に  
あへるよろこびをかしこみて、

十陰

震ぞとて、外に臥すへの、涼しさは、  
戸ざさぬ御代の、しるしなるらん、

大江廣海

ぬばだまの、夜晝わかぬ、震ふりに、  
うごくは人の心なりけり、

狂歌

安亭

家藏も、もみくちやにする、大地震、  
人の心も、もめるかみがた、

右は承候に付上申候、十陰と申は元江戸人、  
當時京都住、其御地の千蔭の門人のよしに候、  
(増訂 3, p.322)

〔聞集録〕

狂歌

かみなりは(にカ)、あたまたゝかれ、地  
震とて、

尻つめらるゝ天の御叱り、(増訂 3, p.333)

狂詩

庚寅七月二日事、從申上刻地震剛、  
最初寄集唱世直、狼狽桑原至線香、  
町屋家藏壁直落、寺社塀垣柱共僵、  
婆母黄声念佛申、祖父青顔祈神禱、  
百姓離歟皆入菰、千頭捨舟獨上塘、

(増訂 3, p.333)

「ペレーの毛とは、火山の爆発の際に、マグマの一部が吹き飛ばされ空中で急速冷却し髪のようなものになったものを言う。非常に軽いため数キロメートル先まで風で運ばれる。ペレーの涙と同じように、火山噴出物の一つである。火山毛ともいう。ペレはハワイに伝わる火山の女神のことで、語源はハワイ語の *lauoho o Pele* である。」

今村明恒の考察は、「降毛考、地震第一輯 16 卷 3 号 p.55 ~ 62, 1944.3.18」に述べられている。

## 12. 白毛降る

ウィキペディアによる説明は、

表-1 増訂大日本地震史料に見られる白毛

| 発生年月日・場所                                                                         | 寸法                             | 記述頁                |
|----------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------|--------------------|
| ①白鳳十三年（西暦 673 年）<br>乙酉十月十四日                                                      | 六寸を長として四寸或二寸三寸                 | 増訂 2<br>pp.163-164 |
| ②天文十九年六月三日<br>（西暦 1550.7.26）<br>岩代國會津                                            | 毛降ル<br>〔會津舊事土苴考〕<br>三日夜、洪水、毛降、 | 増訂 2<br>p.945      |
| ③慶長十八年九月二十日<br>（西暦 1613.11.2）〔異本塔寺長帳〕<br>日本中え赤き毛、土に交と〇て<br>カ 如雨降、                |                                | 増訂 2<br>p.945      |
| ④元和三年 五月十八日<br>（西暦 1617.6.21）<br>京都毛を降ラス、明日マタ同ジ<br>〔考亮宿禰日次記〕<br>十八日壬午・晴・毛降、如葦毛馬毛 | 十九日癸未、晴、今日又毛降、白毛二寸<br>斗有之      | 増訂 2<br>p.715      |
| ⑤元和四年五月二十五日（西暦 1618）<br>江戸、毛ヲ降ラス<br>〔考亮宿禰日次記〕<br>十日〇六月丁卯、去五月廿五日お<br>江戸毛降之由風聞     |                                | 増訂 2<br>p.717      |

|                                                                                              |                                                                                                                                                                                                                                                            |                          |
|----------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------|
| <p>⑥慶安三年六月四日 (西暦 1650.7.2)</p> <p>諸國に降毛アリ</p>                                                | <p>〔武江年表〕</p> <p>諸國毛降，長四五寸</p> <p>〔攝陽奇觀〕○大阪，濱松歌國著</p> <p>一，六月四日○慶安三年毛降ル，長サ四五寸斗り</p> <p>〔玉露叢〕</p> <p>一，六月四日に毛を降らす，長さ四五寸なり</p> <p>〔野史〕</p> <p>六月四日丙戌，兩毛，長四五寸</p> <p>〔本朝天文志〕</p> <p>三年庚寅六月四日兩毛，長四五寸柳營秘鑑年代記</p> <p>〔慶弘紀聞〕</p> <p>六月四日○慶安三年兩毛，長四五寸「〔最上郡年代記〕</p> | <p>増訂 2</p> <p>p.802</p> |
| <p>⑦宝永五年六月三日 (西暦 1708.7.20)</p> <p>出羽國最上郡毛ヲ降ラセリ</p>                                          | <p>同年六月三日四日驟雨雷鳴，二三寸より一尺迄の白毛降る，龍の毛と噂す」</p>                                                                                                                                                                                                                  | <p>増訂 2</p> <p>p.251</p> |
| <p>⑧正徳三年四月晦日 (西暦 1713.5.23)</p> <p>江戸ニ異物降ル</p> <p>「〔武江年表〕</p> <p>四月晦日，江戸中白き花降，又舍利の如き物ふる」</p> |                                                                                                                                                                                                                                                            | <p>増訂 2</p> <p>p.269</p> |
| <p>⑨正徳三年六月二十九日</p> <p>(西暦 1713.8.19) 日光降灰アリ</p> <p>「〔御番所日記〕</p> <p>六月廿九日 午刻白灰降」</p>          |                                                                                                                                                                                                                                                            | <p>増訂 2</p> <p>p.270</p> |
| <p>⑩享保九年六月二十五日</p> <p>(西暦 1724.8.13) 江戸白毛降ル</p>                                              | <p>「〔武江年表〕</p> <p>六月二十五日，東都毛降，長さ數十尺に餘るもの多し，色白く馬の尾の細きが如し」</p> <p>「〔月堂見聞集〕</p> <p>○六月廿五六日，江戸近辺大雨洪水，雨の内に馬の毛の如きもの長さ二三寸，赤白相交りふり申候由，但所々に如此歟」</p>                                                                                                                 | <p>増訂 2</p> <p>p.310</p> |

|                                                                                                                               |                                                                                                                                                                                                                    |                            |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------|
| <p>⑪寛保二年四月十四日<br/>         (西暦 1742.5.18) 北海道灰及ビ毛ヲ降ラス<br/>         「〔北海道志〕<br/>         寛保二年四月，灰降ル，灰中赤白色アリ，（大森註）大島噴火ナランカ」</p> | <p>「〔新撰北海道史〕<br/>         天雨灰，灰中赤白色長毛交下，長七八寸或有尺有餘者」</p>                                                                                                                                                            | <p>増訂 2<br/>p.362</p>      |
| <p>⑫寛延三年<br/>         (西暦 1750) 六月中旬江戸毛降ル</p>                                                                                 | <p>「〔年號記〕<br/>         〇寛延三年六月中旬江戸天氣不正之處，白キ毛下町ニ降，三四寸計ヨリ一尺余迄有ト云，</p>                                                                                                                                                | <p>増訂 2<br/>p.378</p>      |
| <p>⑬寶曆九年七月二十七日<br/>         (西暦 1759.8.19) 北海道大島噴火シ青森降灰ス</p>                                                                  | <p>「〔青森市沿革史〕<br/>         二十七日残暑甚強，晴天ニ有之候處，……白毛も交り降り候，毛長二三寸ヨリ六七寸迄，二十八日朝五ツ過ヨリ降止申候，</p>                                                                                                                              | <p>増訂 2<br/>p.405</p>      |
| <p>⑭安永六年七月二十九日<br/>         (西暦 1777.8.31)<br/>         伊豆大島噴火，火山砂及ビ火山毛ヲ飛バシ，毎夜品川沖ヨリ火光天ニ映ズルヲ望見シ得タリ，</p>                        | <p>「〔大嶋山火記〕水戸彰考館藏本<br/>         私御代官所伊豆國附大嶋之内三原山御洞と申所，餘程廣場所にて草木一切無御座，小石交之砂土山に候處，當七月廿九日暮時，地中より火燃出，四方空より赤煙立，燒登候音夥數聞，折々地震仕，時々髮の毛より細黒白長さ壹寸位ヲ貳三寸位有之灰，并小きかなぐそ之様成灰降，……<br/>         酉八月十九日 江川太郎左衛門<br/>         御勘定所」</p> | <p>増訂 2<br/>p.492</p>      |
|                                                                                                                               | <p>「〔信州浅間嶽焚崩紀事〕<br/>         天明三年卯の水無月末の九日，いとしろくつゆめきたる毛の四五寸ばかりなる，或は尺にあまりたるが，降來て，人毎にひろふ，」</p>                                                                                                                       | <p>増訂 2<br/>p.602</p>      |
| <p>⑮文化十二年<br/>         (西暦 1815)<br/>         「〔赤須上總 舊記録鈔〕〇長野縣上伊那郡<br/>         文化十二年六月廿七日</p>                                | <p>白毛（長さ四寸より七寸位）天より下る」</p>                                                                                                                                                                                         | <p>増訂 3<br/>pp.202-203</p> |
| <p>⑯文政七年八月十五日<br/>         (西暦 1824.9.7)<br/>         江戸青山・麻布ニ白毛降ル</p>                                                        |                                                                                                                                                                                                                    | <p>増訂 3<br/>p.244</p>      |

|                                                                                |                                                                                                                                                                                                                                                             |                            |
|--------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------|
| <p>⑪ 文政九年六月二日頃<br/>(西暦 1826.7.6)<br/>羽後秋田・湊・能代邊毛降ル、六月九日角館ニ、七月十一日秋田ニ再ビ降毛アリ、</p> | <p>「〔角館火災地震年譜〕〇武藤鐵城編<br/>六月二日頃久保田〇現今ノ秋田、湊、能代邊まで毛降る、七月十一日、久保田に白馬の尾の如き毛降りたりとて江戸へ送り評判となる、<br/>六月九日、角館の中町に一尺四寸程の白毛、田町に三寸より七寸位の毛降る、〇文政九年戊七月十一日、出羽國秋田へ白毛ふりしよし、彼地高瀬の正兵衛より、〔紙魚室雜記〕〇城戸千楯著<br/>翌亥四月五日申來り候よし、同五月十日以文會へ何某持出られしを見受たり、白馬の尾の如き色にて、長五六寸もあらんとおぼしき七八筋見たり、</p> | <p>増訂 3<br/>pp.246-247</p> |
|--------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------|

### 13. 終わりに

1960 年のチリ津波から、津波に関心を持ってきた。チリ津波時に、引波で干上がった潟に残された魚を拾いにゆき、次の押し波で命を失った話をあちこちで耳にした。記録にも

残っている。

同じことを、600 年前の正平十六年六月二十四日（西暦 1361.8.3）に経験していたのであった。古い記録を正確に伝え、忘れずに、人命を確実に守らなくてはならない。